



「道」



理事 中林 秀人

此の道を行けば どうなるのかと 危ぶむなかれ 危ぶめば 道はなし
ふみ出せば その一足が 道となる その一足が 道である
わからなくても 歩いて行け 行けば わかるよ (ダーッ!!※)

清沢 哲夫 (哲学者)

アントニオ猪木 (プロレスラー) が引退試合で引用 ※は追加

新型コロナウイルスは日々の生活と共にあらゆる仕事のスタイルを変えました。当協会でも対面式の多くの会議や研修、各種事業が取りやめとなり、オンラインを基本とした活動へ移行しています。本園（八王子市）周辺もあちこちで感染者が確認され、まさにいつ・どこで発症してもおかしくない状況が続いています。

そのような中、広報誌9月号「路」で日ごろお世話になっている先輩理事から後輩へのエールがありました。思えばこの業界に入り団体活動をすることで、多くの先輩方とのご縁ができました。毎月開催している地元協会の役員会では、知識と経験かつ個性豊かで一家言ある先輩方のエネルギーに圧倒され、会議を進行する者として時には「まいったなあ…これ、どうやってまとめるの!？」と頭を抱える時もありますが、そうは言っても困った時や分からない時は適切な助言やフォローをしていただき、今思えば当の本人が気づかぬ間に、随分とたくさんのことを学ばせていただきました。人間誰しも得手・不得手はあるのかもしれませんが、人と関わればその人数分経験を積むこともできます。強面で厳しくも優しい先輩方に囲まれ、時にはミスもしてしまいますが、今日まで充実した保育の道を歩ませていただきました。

地元ネタは色々とききませんが、東京の団体の広報誌ですからここからは当協会の話へ移します。オール東京となれば地元をはじめ、都内各地の先輩方と活動する機会に恵まれ、それにより一口に「東京の保育」とは言っても、区市町村ごとによって随分異なる状況であることや、団体活動にも色々な方法があることを知ることができたのは、その後の自園はもとより各種団体での活動に大きく役立つこととなりました。

そのような先輩方との関わりの中で、私が未だ忘れられない光景と言えば、当協会の設立に向け、現（元）理事の多くの方が、正に喧々諤々の議論をしていた姿です。

資料を遡ること平成16年、「保育団体統一の可能性を考えるプロジェクト委員会」から始まり19年の当協会の発足まで、東京の保育の更なる向上のため、旧保育4団体（当初は東社協を含む5団体）を一本化するという理念は良しとしつつ、そうは言っても団体による歴史的経緯や執行部の意見の相違等のため、意見集約の難しさを目の当たりにしました。それでも鬼籍に入られた先輩をはじめ、各団体の代表者の方が議論を重ね、少しずつ東京の保育の新たな道が開けていく姿を見て、丁寧な議論の積み重ねと日ごろの人間関係の大切さ、一園長と団体役員による立ち位置の違い、自園と保育団体の利益の差別化等をこの目で直に見ることができたのは、知識・経験とも未熟であった私に、大きな影響を与えてくださりました。

閑話休題、新型コロナウイルスの見通しは未だ不透明です。各園でも試行錯誤し時には不安を感じつつ、新たな保育の道を作っているのではないのでしょうか。

しかし、今でも思い出す平成28年の7月、当協会と全私保連の主催で開催した「第59回 全国私立保育園研究大会東京大会」。我々は保育園関係者の集団なのに、大会のオープニングアトラクションから各種研修、特別講演や懇親会（盛り上がりが凄かった!）、会場内を埋め尽くした参加者と出展業者の数々。そのいずれもが充実し、全国から来た参加者の驚いた様子と笑顔、青年委員会の若きメンバーによる元気いっぱいの活躍が臉に浮かびます。そして今、それをなし得た先輩方+αの方々が協会には集結しています。

令和2年度は会員各位、各園、そして当協会にとって試練の年とも言えるでしょう。とは言え大変なのはどの職種とて同じこと。であるならば、それをどう乗り越えるかは各々の気の持ちようかもしれません。

協会では現在、団体として新たな道を作るべく、役員や専門部・委員会のメンバーが議論を交わしています。会員の皆様方には引き続きのご理解とご協力をお願い申し上げますとともに、新型コロナウイルスの速やかな収束を願い、つたない本稿を終えたいと思います。